

## 賀露を愛した英傑たち ～ 随筆家・大谷博 著 『かろだんぎ』 ～

「つれづれなるままに、日暮らし、硯（すずり）に向かひて、心にうつりゆく……」

これは、中世の随筆家・吉田兼好が記した『徒然草』の書き出しです。日々の暮らしの中でふと心に浮かぶ思いを通して、移ろいゆく人生の姿や、喜びや迷いを抱えながら生きる人の姿を静かに描いたこの作品は、今も多くの人に親しまれています。

賀露にも、『徒然草』を思い起こさせる随筆集があります。大谷博著『かろだんぎ』です。氏は、学校教員、鳥取県教育委員会、鳥取県立博物館など、多彩な職務を経験される一方で、公民館や青年団、教育振興会などの地域活動にも尽力されました。

「若さが大きな力!」「いざふるいたて賀露健児!」「賀留ノ津口マン!」の三部からなるこの随筆集には、賀露の風景や人々との出会いが、やさしく温かな言葉で綴られています。読むほどに郷土への親しみが深まる一方で、地域が抱える課題や人の未熟さ、思わぬつまずきについても、誠実なまなざしで描かれています。

「町の自治を考える」という一節（抜粋）を紹介します。

“自分で自分のことを処置する”ことが自治の持つ意味であるとすれば、あなたまかせの自治組織は、その使命を失い、構成している者たちとはかけ離れた存在になってしまうだろう。

教育活動を旗印に新たに発足した公民館は、その目的である各団体に教育の場を提供することだけに安住するのではなく、町の政治、経済、教育文化の情報を整理して町活動に活かし、町づくりの中心にならなければならない。

昭和 47 年 12 月 10 日「かろ広報」創刊号 投稿

一見すると耳の痛い指摘にも思えますが、そこにあるのは批判のための言葉ではありません。公民館が果たすべき役割や地域の自治のあり方を見つめ直し、人びとが主体的に関わる地域であってほしいという願いが静かに流れています。褒めることも指摘することも素直に書き分ける姿勢が、大谷氏の随筆を味わい深いものにしているのでしょう。

随筆集『かろだんぎ』は、賀露小学校の記念誌や広報誌「かろ広報」に投稿された文章をノートにまとめたもので、残念ながら一冊の本として世に出ることはありませんでした。しかし、賀露の歩みを伝える貴重な記録として、『賀露誌』にも多く引用されています。『かろだんぎ』に込められた視線や感受性は、時代を越えて人の心に届く力を持っています。後の世にそっと手渡されるべき、大切な心のメッセージです。

